近代（モダン）資本主義前期に咲いた大輪の花ラスキン

廣瀬　達志

ラスキン（一八一九―一九〇〇）は、生存中の言動に対するイギリスでの絶大な人気や支持、美術やトルストイやプルーストなどの文芸やガンジーの独立思想への影響など、その影響力は圧倒的なものでした。多少遅れてやってきた漱石や内村鑑三や宮沢賢治ほかの、明治以降の日本人知識人たちへのラスキンの影響力も考えると、ラスキンはちょっと無視できない存在です。イギリスでも多くの国民の支持を得て一世を風靡した評論家ですが、ある時期から誰もが忘れ去ってしまったような不思議な立ち位置の人物です。

ラスキン自身は忘れ去られてしまったかのようですが、次の時代を担った多くの人々にラスキンの影響は色濃く反映されています。

そこで「ラスキン」に一度焦点を当ててみて、当時の西洋（特に英国）の時代背景を簡単におさらいしておきたいと思います。

この時期、大英帝国はビクトリア朝を迎え、産業革命による資本主義の発展＝商品生産と、植民地からの収奪で帝国主義の栄華を極めている時です。栄華の背後には工場のスモッグや過酷な労働者が生まれ、大きな時代転換期の期待と不安がイギリスに渦巻いていました。この一歩先んじた世界盟主イギリスに対してフランス、ロシア、ドイツあたりがその独走を阻止しようとしている時期です。漱石が称賛した日英同盟もこの時期のことです。

「蒲田モダン研究会」ではこの後、ラスキンの下に結集した若手画家集団「ラファエル前派」や、その思想から独自の運動を展開したウイリアム・モリスの「アーツ・アンド・クラフツ運動」やホイッスラーとジャポニズム、アールヌーボーやアールデコ、バウハウスに至るまでの系譜、また社会福祉や田園都市構想までの報告をしましたが、本稿はラスキンにとどめておきます。

ラスキンが理想とした労働観

ラスキンは著作『ヴェネチィアの石』第二巻、第六章『ゴシックの本質』の中でゴシック建築を高く評価し、その建築作業に携わった中世の石工たちの思いを、建築物に対応させながら「建築者に属する本質」として、好意的に評価し「中世の職人が享受していた労働の自由」にまで言及し

ました。

そしてラスキンはこの中世ゴシックの美と対照することにより、（ラスキンが生きている）同時代のイギリスの装飾美術が自賛する完全性を、むしろ解放されたはずの労働者が（産業革命の結果）強いられている苛烈な奴隷労働の象徴と見做しています。

ラスキンの時代は産業革命以来、大量生産が実現し、中産階級が生まれ始めた時代です。産業労働者は機械の一部として分業による労働を要求され、この時期はまだ「労働者の権利」も確立していない「奴隷労働」と見られていた時期です。この労働者の置かれた現状を、カーライル、ラスキンやマルクス、社会主義者、キリスト教会指導者ほかの多くの知識人は問題視しています。

特に、ラスキンが労働の自由や喜びに着目したことは、産業革命以降の「労働からの疎外」に対しての回答でもあり、この後、この視点からの経済学批判に発展していきます。

ラスキンの時代への批判

ラスキンは「美」の生産という立ち位置から出発し、アダムスミスの古典派経済学を継承するリカード、ミルの経済学に対して批判をします。労働者の現状に対してあまりにも楽観的な「神の見えざる手によって市場は均衡を保つ」という放任主義＝市場原理主義の理論に対して、「それは学問・科学ではない」と噛みつきます。

特にミルは「経済学は科学である」と位置づけたので、「普遍性のある科学なら、現在（一九世紀）の貧困や労働者のストライキから派生する恐慌で『生』そのものが危機的な状況なのに、科学の法則や原理によって解明し、その解決策をなぜ示せないんだ」と批判します。

また、ラスキンは古典経済学の基本となっている人間観「貪欲と進歩への欲望は不変。利己的動機によってのみ行動する人間」については、基本が間違っている、人間は利害だけで動くものじゃないと否定します。

ミルは、「良心・情愛」などは枝葉であり、人間の本質は「利害・損得」だと規定します。

当初、ラスキンの時代への警鐘を多くの人々は善意の象徴として受け止めていましたが、やがて資本主義の欲望に打ち勝てなくなっていきます。そして多くの人間がミルに賛同します。なぜ、ミルに賛同したかというと、今まで道徳的に（宗教的にも）了解していた「他者への憐み」や「環境や周囲への良心的配慮」などをかなぐり捨てて、利益追求をする言い訳を手に入れたからでしょう。開き直った様に「これは人間の本質なのだから、遠慮などいらない。他者は蹴落としてもいいんだ」と自分に言い聞かせる「古典

経済学という免罪符」を時代は手に入れたのだと思います。

ラスキンは工場の煤煙による大気汚染、爆発的な人口流入によるロンドンの破壊に対して、私財を拠出しセント・ジョージ基金を設立して環境保全運動を始めます。（これがナショナル・トラスト運動のはじまりと言われています。）この後、ラスキンは更に多額の私財を投げ打って、労働者救済システムを作ろうと、情愛に基づく協同組合＝セント・ジョージ・ギルドを立ち上げて、東奔西走しますが結局は失敗し、イギリスの湖水地方の田舎町に引っこみ余生を送ることになります。

実はミルはラスキンからの批判の本質を理解していたようですが、表立って反論せずに無視しています。（ミルは「自分たち以外の人間で解っているのはラスキンだけだ」と発言しています。）

イギリスの近代＝モダンの到来に批判的に対応したラスキンからは多くの知識人が影響を受けています。彼らは決してラスキンをそっくり踏襲した訳ではありませんが、近代＝モダンへの懐疑的な視点や、克服すべき問題点はそれぞれが継承しました。これらの継承者たちの真摯な姿勢は、近代から現代にいたる今もなお私たちの課題だろうと思っています。

注）写真は、ウィキペディアより転載しました。